

特集 子ども談義

子どものちょっとした仕草や言葉、親子や子ども同士の会話の中には、子育てや子どもと接する時のヒント、心のありようが垣間見えることがあります。

今回は、公立小学校校長、日本国語教育学会常任理事等を歴任された、児童文化研究家の光永久夫さんの連載「子ども談義」（平成2年から平成6年まで）からそんな一幕を振り返ります。読者のみなさんは何をお感じになられるでしょうか。

歯医者さん

「育てる」通巻267号 平成2年10月

歯医者さんの待合室である。私の隣りに六才位の男の子とその母親らしい女性が椅子に座って待っている。

「ママ、歯を抜くっていたい？」

「ちょっと痛いけど……ケンちゃんなら大丈夫……がまんできると思うよ……」

「ふうん……ぼく……いやだけど……がまんできるかな……」

不安そうな子どもの様子は隣りにいる私にひしひしと感ぜられる。

「○○さん——どうぞ」

看護婦さんの声である。不安そうだが半ばあきらめたような顔をして、そのケンちゃんなる子、母親の傍（そば）から離れようとしている。

「ケンちゃん——頑張つて……」

その母親は手を小さく振って自分は席を離れようとしない。

『この母親は至極冷静だな……こんな小さな我が子が

抜歯するのに……、自分は控室に座ったままでいら
しい……それにしても、この子は実に偉いな——これ
から自分の歯を抜くというのに——自分だけで治療室
に入って行くなんて……」

私は感心しながら、それとなくこの親子の観察を続
けた。母親は、自分の座っている場所を少し右にずら
せた。それは驚くことに自分の子が治療を受けようと
する場所が全く見えない場所だ。むしろ私の座ってい
る場所からの方が、治療室の中のケンちゃんなる子
の様子がよく見える。

『このお母さん、我が子に対して冷淡な人かも知れな
い——それにしてもケンちゃんなる子……偉くしっか
りした子だなア……』なんて感心して治療室の中の様
子に、私の関心は向けられた。

「痛くないからなア、ちよつとシクツとするだけだ
……ほんの一寸ちよつとだよ……」

歯医者さんのことばにも、緊張しているケンちゃん
の様子は、その足許の方しか見えない私にもよくわか
る。お母さんの方は私の座っている長椅子の右端の方
に座ったままうつ向いて黙っている——心配そうな様

子は私の方にも伝わってくる。

治療室の中からは、カチャカチャとした器具の音
や、看護婦さんたちの小声が聞えてくる位である。

「イテツ——……」ケンちゃんの声である。どうも注
射を打つたらしい。それ以後は何も音は聞こえない。
手際よく動く二、三人の大人たちの姿が見えている。
ケンちゃんの足許は、一回大きな動きがあっただけで
後は動かない。

抜歯手術は順調に進んでいるらしい。私の傍の母親
は、黙って下を向いたまま祈るように目をつぶってい
る。

やおら二、三十分程経った頃、そのケンちゃんなる
子が、口にいっぱい脱脂綿を含みながら母親の前に出
てきた。すると、その母親はいきなり我が子を
ギューツと強く抱きしめて言った。

「ケンちゃん、偉かったわね——やったじゃない——
偉かったわよ。本当に偉かった——強い子ねエ——ケ
ンちゃん。ママうれしい——パパにこのこと話そう
ね。偉いケンちゃんの話——。うれしかったわ」

人前もはばかり抱きしめ語りかけているこの母

親。ケンちゃんの目の周囲には痛さをこらえた涙の跡がいつぱい残っている。

偉い。実に上手だ。育て方の上手なお母さんだ。私はこの瞬間を見て咄嗟とつさに思った。子育ての原点のコツを見た思いだ。

尋常ではないギューツと我が子を抱きしめたあのポーズ……格好ではない親の本当の姿。本当の心だった。

私も思わず傍にいてことばがでた。

「偉かったね。ケンちゃん——」

振り向いたケンちゃんの写真の前歯の間には、かみしめている脱脂綿が真っ白く見えていた。



飯ごう炊さん

「育てる」通巻282号 平成4年1月

子どもたちに、ふだんあまりしていないことをやらせてみると興味をもつて一生懸命にするものだ。キャンプ場での飯ごうを使つてのご飯炊きなど、その最たるものであろう。

でも、今の子どもたちは、マッチ一本すら使い道をよく知らないから大変である。マッチの軸の端の方をつまむように持ち、箱のこするところを撫なでるように左右に振っている。火が仲々なかなかつかないばかりか、マッチ棒は真ん中あたりですぐにボキリと折れてしまっている。二十本位マッチ棒を使つた後で、「先生、このマッチ、すぐ折れてしまうから使えないマッチです。」こんな報告をするのである。

「そんなはずはないよ。マッチはね、こうやって持つて、こうした角度で、こするところに当てればいいんだ。」

先生が、手に取つて一本火をつけてみせた。

「さすがア、先生はうまいなア」

マッチ一本の火に先生は感嘆詞を子どもたちからいっぱい受けている。

ところがである。その火に子どもは新聞紙をピリピリと少しばかり破いて、そつと乗せている。新聞紙の小さな端切れはメラメラと燃えてすぐに消えてしまう。また大急ぎでマッチをすり紙に火をつけている。今度は少し大きな紙片である。消えない中に大急ぎで新聞紙を千切つて重ねているが、新聞紙が燃えているだけで一向に木には燃えつかない。その中に、新聞紙が無くなってしまう始末。

「先生、新聞紙が足りません。」

また、先生に報告に走っている。

「えつ、あれだけあつた新聞紙が無くなった？　しょうがないなア」

先生は仕方なく最初からの手順を子どもたちの前でやってみせた。

「新聞紙はだな、こうやって丸めて使うのだ。君たちみたいに只破いて平らに火に乗せただけではいつまでたつても薪に燃えうつるような火にはならないよ。

丸めた新聞紙の上に、こうして乾いた小枝などを乗

せ、その上に少しこれよりも大きな目の木を乗せ、薪を入れておけばいいのだ。

ほら、ここまで組んだから、もう火はつけられるでしょ。下の新聞紙の端にそつと火をつければいいのだ。○○君、やってごらん。」

言われた子は、おぼつかない手付きであつたが最初のときとは全く違う……一発でマッチの棒には火がつき、それを新聞紙の端にそつと持つていった。

先生の組んでくれたたぎつけはゴーゴーと音を立てて燃え始めた。

「ほーら、マッチ一本で、こんなに勢いよく燃えただろ、よく火を見ておきなさい。」

先生は、別のグループの方にでも同じような指導のために回つていつてしまった。

一巡して最初のグループに戻つてきて先生は驚いた。あの勢いよく燃えていた火が燃えつきてしまっているのだ。まだ、飯ごうのご飯は炊けてはいないはず――。

「駄目じゃないか……火をよく見ていなければ……。」

子どもたちは一斉に、

「見ていました。みんなで……」

驚きである。子どもたちは火の燃えつきるのをジーツとみんなして見つめていたのだ。先生は少し声を大きくして言った。

「くべなきやだめじゃないか……」

「くべるって？」

子どもたちは怪訝な顔をしている。今や、子どもたちの世界には、くべるということばも聞かなくなってしまったのだ。

先生は、ことばの説明をしながら、また最初からやり始めている。

「くべるって言うのはね、火に燃えるものを入れることです。」

子どもたちは、尚も怪訝そうな顔をしてさらにたずねた。

「それじゃ、火に入れるって言ったらいいんじゃないですか？ どこかの方言ですか？ くべるっていうのは……」

「いいや方言じゃない……昔から日本では使ってきたことばだ。つまりだな。昔、人々が火を燃して生活す

ることが中心だった時代のことばだ。そのくべ方にもいろいろあってな、上手なくべ方、下手なくべ方……いや、この話は後でみんなにしよう——」

今や、子どもたちの生活から全く消え去ってしまった概念やことばがたくさんある。こわいのは、私たち大人が、そうしたことも子どもたちが、知らない、できないということに気付いていないことだ。こんなことは当然知っているはずだと思っていることも解っていないことだ。これに気付かないで通り過ぎてしまったとしたら……どういうことになるか……恐ろしいことである。

子どもたちのキャツキャツとはしゃぐ声を聞きながら深く考えたことである。



おつかれさま

「育てる」通巻286号 平成4年5月

近頃、学生に講義をしていて気になることがいくつかある。その第一は、声に出して挨拶のことばかり返ってこないことだ。

「こんにちは——」こちらは、明るく元気な声で言っているのに、三十名程の学生の方は無言である。前の方の五、六人が軽く頭を下げるポーズをするだけである。

「声を出して、挨拶を交わしましょうよ」

「えっ声を出して挨拶？ ……まるで子どもみたいだなア……」

声に出して挨拶することは、幼ない感じがするのだという。困ったものだな——と思っていると学生のつぶやきが耳に入った。

「この先生、もと小学校長だからなア……おれたちを子どもあつかいにしてるんだ」

「そうか、それじゃ仕方がない……合わせるか……でも、何だか変だなあ……」

気になることである。後日、同じ講師たちとの教官

会議でいろいろと意見がでた。

「今の若い者に、声を出しての挨拶を要求すること自体、無茶なこと。それ位世間全体が無音で白けているのだ」

「それにしても、私どもが担当しているのは教育学部の学生で、その六、七割の学生は教師志望である。何とかしなければ……」

「それは、大学段階の問題ではなく、それ以前の教育での指導だ」

「いや、いつでも大事な問題だと思う。教育が人間関係を大事にすることなら、こうしたことこそが基本であると思う」

「私はアメリカに二年留学していたが、大学は学問を追求するところであって、そうした生活習慣を指導するところではない」

「いや、アメリカの教育云々^{うんぬん}ではなく、今は日本の教育云々だ。少なくとも教師養成のつもりなら、挨拶をするこ

とによつて、人間関係が大切なことを知らしめることだ」
いろいろと考えさせられるおもしろい話し合いになった。私はふと以前中学校の卒業式に来賓として呼ばれたときのことを思い出した。

そのとき、二五〇人程の卒業生の名を学級担任が大きな声で読み上げ呼んでいるのだが、来賓席の私のところに返事が聞こえてきたのは、数える程の数である。私は、とても気になった。自分の名前をあんなにはつきりと呼ばれているのに聞こえるような返事を返さない。白け社会は、中学生にまで達しているのか——と考え込んでしまった。

聞こえない返事の中学生たちは、校長先生の前でも変な証書の受け取り方である。渡す方の校長先生が、きちんと頭を下げているのに、受け取る方の中学生は、余り頭を下げない。中には逆にそっくり返っている生徒もいて、見た目にも、心を交し合っているようには感じられない。

その日、私は来賓代表として祝詞を頼まれていた。用意していた祝詞の話の内容をポンと切り変えてしまったのだ。

「今後の君たちの幸せは、向こうからはやってこない。君たち自身が幸せを求めて向かっていくのだ。呼ばれたら、明るい、相手に聞えるような返事、これが欲しいのだ。ことばには心がある。心と心を交し合う

ことが、幸せを求める第一歩である。挨拶、返事。これは心のことばである」

こんな説教調の話になってしまった。後方の父母の席から割れるような拍手が起こった。

卒業式が終わって控室に戻ってから、いろいろと子どもの挨拶をはじめ、ことば表現について話はずんだ。

そのとき、ある小学校の先生の話が、おもしろいな——と記憶に残っている。

それは、その先生が一年生を受け持っていたときのことだそう。学校帰りに多くの子どもたちは、「先生、さようなら」と、挨拶するのに、ある一人の女の子は、「先生、おつかれさま」と、言うのだそう。六才の子が自分に向かつて「おつかれさま」などことばをかけてくれるのは、奇妙な感じであると同時に、ことばをかけられた自分は何と応じてよいのか、その応じることばが、とつさにみつからなかった——というのだ。

後日、解^{わか}ったことだが、その女の子の家は、スーパーマーケットを経営しており、従業員が仕事を終えて帰るとき、家族の人たちが、

「はい、おつかれさま」ということばをかけていたの

だ。一年生の子は、このことばを、

「苦勞様、ありがとう、さようなら」の心をこめたことばにちゃんと受け取っていたのだ。だから、先生にも、その心をこめたことばとして、

「先生、おつかれさま」と、言っていたのである。

ことばには、心がある。ただ、言えがいいというものではない。

今の子どもにこそ心のことばを投げかけ、心からのことばを受け取ってあげたいと思っている。つまり、機械と対座している機会の多い時代だからである。



生き生きくらし その一

「育てる」通巻288号 平成4年7月

過日、八坂の山村留学センターに、子どもたちをたずね初めてその生活を拝見した。六十六才の爺さんじいさんが、東京から車をひとりで運転し約四時間かけてのチャレンジである。でも、どんなところで、どうやって子どもたちが生活しているのか知りたい欲望と、ある種の期待をもつての張り切った気持ちが支えたのである。難なく楽しんで行ってしまったのだ。

「こんにちは、いらつしやい。」

明るい指導員の方の挨拶の声を聞いてホッと安心。途中、道を二回程知らない村の人たちに聞いたが、みんなとても親切に教えてくれる。地域ぐるみで山留センターを大事にしてくれていることが感じられてうれしい。

その気持ちが私の表情にでていたのか、初めて出会うどの子も笑顔で迎えてくれる。今や都会の子たちは、知らない人とは口もきいてはいけななど指導されているところもあるのだ。以前、ある学校をたず

ねた折に、その学校近くで子どもに道を聞いたら黙って駆けて逃げていかれた苦い経験もある。

ここでは、それとは全く逆である。最初から親しみをもつて寄つてきてくれるのだ。子ども大好きな爺さんが、久し振りに味わつた純粹な子どもらしい子どもとの出会いに、喜びがこみあげてくる。

四十人程の在住している子どもたちといつしよに夕食をした。責任者の方に私のことを紹介してもらつたら子どもたちの親しみは一段と増したようで寄つてきてくれる。私が、子どもたちに、いろいろなことをたずねると、積極的によく説明してくれる。何かここで生活を誇りに思っているようだ。

「あしたの朝、ぼくは五時頃起きるんだ。この子と二人で……。」

「そんなに朝早く起きてどうするの？」

「かぶと虫をつかまえるんだもの……もうちゃんとしかけをしてあるから……きつといっぱいとれると思うんだ。」

「どんなしかけをしたの？」

「炊事場から……古くなつたバナナをもらつて大きな

木の根元にこすりつけてあるの。場所はね。秘密……。」

二人の男の子、目を輝かせて話してくれる。ふと自分の五、六十年昔の子ども時代を思い出した。小学校三、四年の頃だったか、私の二つ年下の弟とかぶと虫取りの競争をしたことがある。兄の私がさつぱり取れないでいるのに、弟の奴はいっぱいつかまえているのだ。

探し場所が悪いのか、それとも特別なことを弟の奴がやっているのかわからない。とうとう私は降参して頭を下げて弟に取り方を教わつたことがある。何ということはない。食べた西瓜すいかの皮を前日の夕刻、かぶと虫のいそうな木の下に置いておくのだ。そうした方法を知らなかつた私は、虫を見つけて歩いていただけだったのだ。弟に頭を下げて教わつた苦いが懐しい思い出を、この子たちは瞬時に思い起こさせてくれたのだ。感謝。

驚うきの声で、私も朝五時半には目が覚めた。外にでてみようと階段を下りた。集会場の放送機の下に一人の子が柱に寄りかかつて座っている。

「君？ どうしたの？ こんなところで……？ まだ寝ている時間でしょ？」

「放送当番です。六時に音楽をかけなければならぬので……少し早く起きて待っているんです。」

五年生ぐらいの子だった、立派に責任を果たそうと頑張っているのだ。敬服。

センターから庭にでてみた。下の池でもう男の子が二人釣をしている。

「こんなところに魚がいるの？」

「いるんです。きょうは、まだつれないんですけれど」

……

「そうかなア……こんなところに魚がいるのかなア」

……

都会ぐらしの私にはとても想像のつかない一見よんだような池である。池というよりは水たまりの大きなものに見えたのだ。ところが、その子が私の前で鰯を一匹釣り上げた。

「うわーっ、いるんだ。本当にいるんだ。釣ったね。よかったね。その釣った魚はどうするの？」

「食堂のところの水槽に飼っておくんです。もう八匹入っています。」

その子のニコリとした笑顔は忘れられない。

自然とこんなにも一体となつてくらしている子どもたち……今、都会で忘れられている大事なもののやこ

と。すばらしい生活がここにあることを見せられた。

下の坂道の方から、あのかぶと虫をしかけた子が二人上ってくる。きつと五時前に起きて秘密の場所へ行ったのであろう。手には何も持っていない。

「つかまらなかったのかい？」

「はい。駄目でした。でも、また明日挑戦してみます。場所とやり方を少しかえて……」

ゆうべの姿では、きつと私に戦果を見せることを夢見たのであろうが……かわいそうなくらいしょげかえっている。でも再度挑戦してみる。——と切り切るあたり、生き生きとした子どものからしがあることが私にははつきりと見えた。



生き生きくらし その二

「育てる」通巻289号 平成4年8月

山留センターでの子どもたちと一緒に朝食を終えた。子どもたちは、すぐに学校への登校である。めいめい自分の準備に忙しい。何しろ標高差三〇〇メートル、中学生は七kmの道を歩いての登校である。その往復の道のりを考えると、私など気の遠くなるような話である。しかも毎日のこと。悪天候や雪の日のことを考えると想像がつかない。

中学生たちは、至極当然のことにように、さつさと自分の準備をしている。指示を受けている言葉は全く聞えてこない。ふと見ると、この登校準備の忙しい最中に小学校の子の世話をしている子がいる。洗濯場の近くでの話だ。

「洗うものは、ここへ入れておきなさい。私は今日四時半頃学校から帰ってくるから一緒に洗濯をしよう……わかったね。」

小学校三年生位の子は、うなずきニコツと笑っている。家庭では姉妹でもあまり見られない風景を垣間見た。

ホッとあたたかいうれしい気持ちがかみ上げてくる。『この子どもたちは、地元の学校では、どういう位置にあるのだろうか、学校の先生方は、どう見ているのであろうか。』私はこう考えると、どうしても八坂の小中学校の方へ寄ってみたくなった。

子どもたちが、みんな登校してしまってから四、五十分程たった頃、私は車で子どもたちの学校の方へセンターを出て後を追った。小学校までは、四kmだそうである。小学校近くで、小学生たちに追いついた。昨夜から一緒に顔なじみの間柄の子どもたちは、山道の山側の方へ身を寄せて手を振ってくれた。

「先に中学校へ行つて、帰りに小学校にも寄るからね。気をつけていつてね……。」

私は小学生たちに言い残して車を走らせた。目の下に学校は見えても山の道は廻り道^{まわ}になつている。距離はあるのだ。冬はどうするのだろうか——私はセンターの方に冬の登校の様子を尋ねてくることを忘れた。別に前^も以つて連絡していなかったのだが、運良く小中学校の校長先生方にお会いすることができた。

中学の校長先生との話の中でいくつもの感動する話

を聞くことができた。

全校生徒が四十人程の山の中学校である。その中の十七、八人がセンターからの子だそうで、学校の大事な生徒であることに先ず驚かされる。何日か前に、全校の意見発表会があった折のセンターの子の発表に、校長先生が感激した話を聞いてうれしくなった。

「ぼくは、ここへ来て、初めは大変だと思っただけで、一学期の途中で馴れた頃からとても楽しくなりました。山の大自然の中でのからし——楽しいというよりも今までの都会でのくらしは、あれは何だったんだろうと思うような気持ちになりました。」

将に山留センターの大切なことをこの生徒は、ちゃんと体得してくれているのだ。

いろいろな話をしていただいた校長先生方の言葉の中から、地元の方々のあたたかい受け入れの体勢も解ったし、良い意味で土地の子どもたちに刺激を与えてくれていることなど私に新しい知識をいっぱい頂戴することができた。

校長室の学校行事の予定表の中に、「受け入れ家庭連絡会」と見馴れぬ文字が記載されてある。

山留の子どもたちが、地元の方の家でお世話になる家の人たちの連絡会だそうだ。お世話をしている方たちはお年寄りが多い。孫のような子どもたちに「お父さん」「お母さん」と親しまれ、家族の一員になっているのだ。肉親の親のように、学校と連絡し合ってくれるとは——私は、また、うれしさがズシンと体の中を走った。

『今度はぜひこの子たちが受け入れ家庭にいる時に来てみたい。どんな生活が個々にされているのか……現代の教育に忘れられているものを、この目で確かめてみたい……』

こうした思いをいっぱい抱いて八坂の村を後にした。

